―五、電話〇三―五二一〇―四〇〇〇、平成十一年七月二十八日、A5判、四九五頁、本体九、五〇〇円〕

漆　浩著・池上　正治　訳

## 『中国養生術の神秘』

『中国養生術の神秘』（医術・巫術・気功）　漆　浩著、池上正治訳　について書評を求められた。四六判　四〇一頁にわたる大著であり、私の理解しえた範囲で書かせていただく。巻末にある「訳者あとがき」を見ても、訳者の御苦労が分り、敬意を表したい。

まず形の如く内容について目次に従って列挙してみよう。

序章に始まり、

第一章　医術の起源はシャーマニズムにある。五項に分れ（シャーマニズムの起源と概念）（医術の起源とシャーマニズムの関係）（シャーマニズムと医術の共通言語）（医のもつシャーマニズム文化の背景）（巫医の最も初期の形態）。巫の意味とその発生。医学に与えた影響と初期の巫医について述べられている。

第二章　シャーマニズムと医術の世界観。三項に分れ（シャーマニズムの「人」と医術の「人」）（シャーマニズムの自然観と医術の自然観）（シャーマニズムの社会観と医術の社会観）。天と人の間をとりもつ巫と、「天人感応」「天人合一」の係わりとそれらが中医学に及ぼした影響。自然観とか哲学との関係にふれている。

第三章　シャーマニズムと医術の共存する要素。四項に分れる。（哲学・政治）（文化・心理）（民俗・地理）（天文・暦法）などの要素に分類し、シャーマニズムが中国歴史のあらゆる分野にくみ入れられ、またどこをとってもシャーマニズムが反映されているという。

第四章　シャーマニズムの医学観。五項に分れる。（生理）（病理）（診断予測術）（薬理）（治療術）等につきシャーマニズムの医学観から論じている。

第五章　医学における巫。五項に分れる。（針灸法と五禁、九宮図）（精神心理療法におけるシャーマニズム）（気功・按摩・導引におけるシャーマニズム）（伝染病の予防とシャーマニズムの儀式）（養生の長寿術のシャーマニズム）。前章が中国医学とシャーマニズムの関係を總論的に述べているのに対し、本章では各論的、実際的方面に述べている。

第六章　歴史上の巫医。六項に分れる。（神話や伝記における巫医）（泰漢以前の巫医）（魏普南北朝の巫医）（隋唐の時期の巫医）（宋代以降の巫医）（巫医に対する取り締りと斗争）。中国医学史に登場する各時代の巫医といわれた医師を挙げ時代の変遷を述べている。以下は結論、訳者のあとがき、索引となっている。

以下、気のついた点を並べてみたい。

訳者もいっているように本書のキーワードは「シャーマニズム」という言葉であり、頻回に出現している。一般的な現

在の見解に従えば、シャーマニズムとは民俗信仰の一部であり、その内容を分析すると、エクスタシーとかポジセションという姿で現われる。中国古代では巫は祭政一致に関わり、医療にも携わっていた事は事実であるが、この時代とそれに続く時代にわたってすべて、シャーマニズム、シャーマンというには、中国のことでは殊になじまないのではなかろうか。巫術（巫覡）・呪術・方術（方士）といってもよいのでは？さらに道教（道士）といった面は巫術・呪術的傾向が強いのであるが、本書では殊更、道教という言葉をさけているように思えてならない。私も平成元年に『道教と不老長寿の医学』を出版しているが、この中国版の訳者も「巫に係わる言葉、術語は現在中国では都合がわるく意識的にさけた」と語ってくれたことを憶い出した。

「医学の起源の一つは労働である」というのにはもう少し具体的な説明が欲しかった（三六頁）。

「禁方」については「禁忌」（タブー）という点が深く中国人の間に浸透していると考えている（四五頁）。

中国文化の歴史的発展のうち、儒学の文化時代（唐―清時代）とあるが、私の考えでは表層ではそうかもしれないが、この時代、儒・仏・道の三教合一（三教同源）が強く推められ、民俗信仰の姿となり著者のいうシャーマニズムの医療も民間医療となって今日に至っていると思っている（一一八頁）

「太一」は北極星の別名（太乙ともいう）でもあろう（一四九頁）。

図二三の出典がなにか。『医方類聚』巻一、五蔵門中の「五臓六腑図」と思われる（一六九頁）。

応報致病訖記と同じように中国民衆の中では「承負」という因果応報的な考えがあった（一八六頁）。

身体に翼が生えるというのは仙人のことであろうか（二二五頁）。

麻姑は伝統的女仙で『神仙伝』にも出てくる。道教では女神とされる（二三七頁）。

図五三の出典がないが、これは『道教』中の『上清大洞真経』からである。なお「六字訣」について言及されたかった（三一五頁）。

巫医の中には、医神として崇められた医師もいたことを追加しておく（三九四頁）。

以上いろいろな点にふれたが、これらをもってしても本書の価値を決して損なうものでないことを強調しておきたい。これだけの広汎な内容をシステム的にまとめられた著者の力量・努力は賞讃に値する。まだ若い方なので今後の更なる御研究・御発展を期待している。

この方面に興味や研究されている方にぜひ御一読を願って止まない。

（吉元　昭治）

〔出帆新社：東京都世田谷区経堂二―二―四、電話〇三―三四三九―〇七〇五、平成十一年七月三十日、四六判、四〇一頁、本体価格四、二〇〇円〕